

巻論

ある時、聴こえに障害のある友人の案内で、彼の母校である某県の聾学校を見学した。その幼稚部では、手話や指文字を用いながら、単語の発音練習をしていた。また、コミュニケーションの意欲を高めるために、集団によるレクリエーションも行われていた。楽しい遊びを通して、子供たちからすると「いつの間にか」言葉を学んでいるという場面だった。

筆者は、この教育実践に感銘を受けたのだが、案内してくれた友人は、無然とした表情で子供たちの様子を見ていた。

彼は、幼児期と同じ学校において、「手話や指文字を使ってはいけない」と厳しく指導されていた。少しでも手を用いて表現しようとするならば、叱責の言葉がとび、手の甲を叩かれる

供たちの様子を見ていた。

彼は、幼児期と同じ学校において、「手話や指文字を使ってはいけない」と厳しく指導されていた。少しでも手を用いて表現しようとするならば、叱責の言葉がとび、手の甲を叩かれる

供たちの様子を見ていた。

彼は、幼児期と同じ学校において、「手話や指文字を使ってはいけない」と厳しく指導されていた。少しでも手を用いて表現しようとするならば、叱責の言葉がとび、手の甲を叩かれる

供たちの様子を見ていた。

彼は、幼児期と同じ学校において、「手話や指文字を使ってはいけない」と厳しく指導されていた。少しでも手を用いて表現しようとするならば、叱責の言葉がとび、手の甲を叩かれる

供たちの様子を見ていた。

彼は、幼児期と同じ学校において、「手話や指文字を使ってはいけない」と厳しく指導されていた。少しでも手を用いて表現しようとするならば、叱責の言葉がとび、手の甲を叩かれる

供たちの様子を見ていた。

彼は、幼児期と同じ学校において、「手話や指文字を使ってはいけない」と厳しく指導されていた。少しでも手を用いて表現しようとするならば、叱責の言葉がとび、手の甲を叩かれる

供たちの様子を見ていた。

彼は、幼児期と同じ学校において、「手話や指文字を使ってはいけない」と厳しく指導されていた。少しでも手を用いて表現しようとするならば、叱責の言葉がとび、手の甲を叩かれる

供たちの様子を見ていた。

彼は、幼児期と同じ学校において、「手話や指文字を使ってはいけない」と厳しく指導されていた。少しでも手を用いて表現しようとするならば、叱責の言葉がとび、手の甲を叩かれる

供たちの様子を見ていた。

彼は、幼児期と同じ学校において、「手話や指文字を使ってはいけない」と厳しく指導されていた。少しでも手を用いて表現しようとするならば、叱責の言葉がとび、手の甲を叩かれる

供たちの様子を見ていた。

彼は、幼児期と同じ学校において、「手話や指文字を使ってはいけない」と厳しく指導されていた。少しでも手を用いて表現しようとするならば、叱責の言葉がとび、手の甲を叩かれる

供たちの様子を見ていた。

彼は、幼児期と同じ学校において、「手話や指文字を使ってはいけない」と厳しく指導されていた。少しでも手を用いて表現しようとするならば、叱責の言葉がとび、手の甲を叩かれる

供たちの様子を見ていた。

彼は、幼児期と同じ学校において、「手話や指文字を使ってはいけない」と厳しく指導されていた。少しでも手を用いて表現しようとするならば、叱責の言葉がとび、手の甲を叩かれる

供たちの様子を見ていた。

彼は、幼児期と同じ学校において、「手話や指文字を使ってはいけない」と厳しく指導されていた。少しでも手を用いて表現しようとするならば、叱責の言葉がとび、手の甲を叩かれる

供たちの様子を見ていた。

彼は、幼児期と同じ学校において、「手話や指文字を使ってはいけない」と厳しく指導されていた。少しでも手を用いて表現しようとするならば、叱責の言葉がとび、手の甲を叩かれる

供たちの様子を見ていた。

彼は、幼児期と同じ学校において、「手話や指文字を使ってはいけない」と厳しく指導されていた。少しでも手を用いて表現しようとするならば、叱責の言葉がとび、手の甲を叩かれる

言語として輝く手話

幅広く市民に共有を

こともあった。そして「社会に適應するため」に、自らも発声し、他者の唇の動きと形から言葉を読む「口話」の訓練が徹底された。ほとんど聴こえなかつた彼にとって、口話法の訓練とそれを用いたコミュニケーション

には、大変な苦勞があつたことは想像に難くない。彼の無然とした表情は、子供に対して優しくなつた学校への不満ではなく、一面的な「社会への適應」という目標のために、手話という言語とコミュニケーション

考、論理、感性、情緒等の基盤となるものとして、ろう者の間で大切に育まれてきた」

この一文は、2017年4月、釧路市で施行された「釧路市手話言語条例」前文の一部である。

手話が排斥され、手話を使うことが権利として保障されなかつた時代は、社会の側が「ろう者から言語を奪ってきた歴史」と言い換えることができる。

今日、そのような歴史を乗り越え、幅広い多くの市民に手話が共有されることによつて、手話は言語として輝く。

(戸田 竜也)

とだ・たつや 北海道教育大釧路校講師